

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520036

研究課題名（和文） 大慧禅の思想史的研究

研究課題名（英文） A Study of the Zen Thought of Da-hui

研究代表者

中西 久味（NAKANISHI HISAMI）

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：00143743

研究成果の概要（和文）：本研究は大慧宗泉の禅を中国思想史のなかに位置づけようと試みたものである。大慧と士大夫との交渉を具体的に考察するために、彼の基本的な伝記資料である『大慧普覚禅師年譜』の補遺と訳注の作成に取り組んだ。この書に見えている士大夫のうちには『宋元学案』に取りあげられている二十数名が含まれ、また、そのなかの張九成・呂本中などの七名は大慧ととりわけ親密であったと伝えられる。こうした士大夫たちについてはできるだけ詳しく調査した。

研究成果の概要（英文）：This research involved an attempt to place the Zen thought of Da-hui Zong-gao within its contemporary context in Chinese intellectual history. In order to obtain a concrete picture of the relationships Da-hui had with the intellectuals (“ Shidafu ”) of his time, I attempted to make a corrected edition and Japanese translation of an important document providing information about him, the “ Da-hui Pu-jue Chanshi Nianpu ”. This document gives the names of over 20 Shidafu, whose names are also recorded in another document describing contemporary intellectual history, the “ Song-Yuan Xuean ”. This research therefore involved a detailed investigation of these Shidafu, including seven of them (including Zhang Jiu-cheng and Lü Ben-zhong) with whom Da-hui is described as having particularly close relationships.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：大慧宗泉 ・『大慧普覚禅師年譜』・ 儒仏交渉

## 1. 研究開始当初の背景

大慧宗泉は宋代随一の禅者である。のみならず、中国禅は大慧においてその絶頂に達した

観がある。しかもその禅は、禅や仏教という枠組から溢れ出て、ひろく士大夫層の心を掴み、思想界・宗教界に実に多大の影響を与え

たのであった。すでに四十年ほど前から、大慧禅は中国思想史の画期的躍進をうながした宗教運動にほかならないと指摘されていた(荒木見悟氏による)。またその一方で、大慧の語録などの彼に関する著述の書誌学的研究が推進され、あるいは訳注なども作成され、大慧禅研究の基本的な資料は着々と整備されつつあった。ただし依然として禅宗史のなかでの研究が主流であり、いわゆる燈史のたぐいからの資料収集ないし法系の詮索では詳密を極めるにもかかわらず、外典の資料などについてはほとんど利用されていない状況にあった。さらには大慧と交渉のあったと伝えられる士大夫たちに関しても、彼らの思想的立場などについては、さほど関心が払われていず、なお課題として残されていたのである。

## 2. 研究の目的

本研究は、大慧宗杲の禅思想について儒仏の交渉という視点から再検討し、彼と士大夫層との交渉を可能なかぎり調査することによって、北宋末から朱子学が成立するにいたる頃までの思想史・宗教史のなかにおいて、大慧禅とか看話禅とか称される彼の禅が果たした役割や意義などを考察し、大慧禅を中国思想史の一環として具体的に位置づけることを試みたものである。

## 3. 研究の方法

(1) まず従来実施されていた研究をふまえて、改めて大慧関係の資料を収集し整理することとした。中国国家図書館や日本の内閣文庫などで、大慧に関わる主な著述『大慧普覚禅師年譜』・『大慧普覚禅師普説』・二冊本『大慧普覚禅師語録』(以下『年譜』『普説』『語録』と略す)などについて、宋元刊本や五山版などのテキストの調査をした。

(2) 大慧が住持していた径山万寿寺(浙江省杭州市余杭)の現地調査をし、終焉の地となった明月堂(妙喜庵)とその前面の明月池の位置などを確認した。また、嘉泰三年(1203)に建てられたとされ、孝宗による寺名八字の書および楼鑰撰「重建径山興聖万寿禅寺碑記」が刻まれた、境内の含輝亭跡に残存する石碑などからも、大慧の事跡を調査した。

(3) 清代以前に撰述された『径山志』『明州阿育王山志』などの仏寺志や、『(淳熙)三山志』『(康熙)衡州府志』『(万曆)広東通志』などの地方志から、大慧の足跡を伝える資料を収集した。とりわけ地方志には大慧の足跡に関わる具体的な記述が残されていることを確認した。たとえば、大慧が四六歳の頃に

住持した福州閩県洋嶼の雲門庵にはのち寧宗の時に雲門寺が建立されたいこと、また大慧が流罪になった衡州では、彼が開福・法輪・鉄岡・西禅の各寺に居住したこと、同じく梅州では、居住した西巖寺とその周辺の状況などが伝えられている。

(4) 以上のような調査にもとづいて、『年譜』および『普説』の補遺と訳注を作成し、それによって大慧と士大夫たちとの具体的な交渉を考察しようとした。

## 4. 研究成果

(1) 『年譜』の書誌的な問題について考察した。この著述はもと大慧の門人の祖詠が編纂し、同じく門人の宗演が開禧元年(1205)以後になって重訂刊行したものであるが、現存する古本としては、宝祐元年(1253)の南宋重刊本(中国国家図書館所蔵)および同じ重刊の刊記を持つ覆宋五山版(立正大学大崎図書館所蔵)の二本がある。

そこでまず、両者の本文は完全に一致すること、したがって五山版は南宋重刊本の覆刻本であることを改めて確認した。あわせて、宝祐元年に『年譜』が重刊されたさい、『語録』(三十巻とされる)や『宗門武庫』『遺録』なども同刻刊行されたいことを指摘し、南宋重刊本の構成についても考察した。

また、本文とは別に、南宋重刊本『年譜』の巻末には程公許の跋・呂祖謙の啓・劉震孫の書後という三篇の文章が附加されているが、五山版の巻末には収録されていないこと、ところが、わが江戸時代初期の写本とされる二冊本『語録』(内閣文庫所蔵)には、もと南宋重刊本『語録』に付けられていたはずの尤\*撰「大慧普覚禅師語録序」が付けられ、それとともに、この三篇の文章が書末に付けられており、しかも、他には全く知られていない楊棟の書後一篇も加えられていることを指摘した。

あわせて、南宋重刊本『年譜』の巻末の三篇の文章のうち、五山版では呂祖謙の啓のみを取り出して巻頭に移して収録しているが、この一篇は思想史的にも重視されること、また楊棟の書後はおそらく南宋重刊本『年譜』の巻末に付けられていたはずであるが、現在では内閣文庫所蔵の二冊本『語録』にのみ見られるものであり、日本にのみ残存することなどについて論じた。なお については中国の学会(2011年)において発表した。

以上の序跋などにもとづいて、南宋末にあたる宝祐元年頃の儒仏二教の交渉についても考察した。尤\*や劉震孫は大慧と朱熹の関わりを強調し、楊棟などは大慧と呂祖謙との関わりを認めており、序跋をとおして、南宋末の士大夫が、大慧禅と朱子学ないし宋学と

の調和を図っている具体的な状況が窺われることを確認した。(以上の\*は〔火偏+育〕)

(2) 南宋重刊本(中国国家図書館所蔵本の影印)を底本として、『年譜』に対する補遺と訳注に取り組んだ。それについては次のようなことに注意した。

この著述にはすでに訓読訳があり、僧名や地名に関しては詳細に調査されているため、それをふまえつつ、大慧に関する基本資料となる『語録』(三十巻)・四巻本『普説』・『宗門武庫』・『雜壽海』、大慧の法嗣の暎瑩の著述『羅湖野録』・『雲臥紀譚』、および『僧宝正統伝』に収められている大慧の伝記などから関連する資料を可能なかぎり収集し、年代が推定できる記事などについては年譜の当該箇所に注記した。なお『年譜』のなかには『普説』が相当引用されているため、当初予定していた『普説』の訳注を『年譜』の訳注のなかに含めることとした。その他にも現地調査や寺志・地方志などから調査収集した内容を必要なかぎり附記することとした。

本研究では大慧と士大夫との交流を念頭に置いているが、『年譜』によって大慧との交際が知られる士大夫のうち、『宋元学案』でも取りあげられているのは張浚などの二十数名であり、そのなかでも曾開・張九成・呂本中の三名は大慧のもとで証悟したとされ、李光・曾幾・汪応辰・張孝祥の四名は大慧の教えを親しく受けたとされている。これら二十数名の士大夫達については当時の文集などによって調査し、大慧と交際していた時期や、その学問や思想の系譜などについても、可能なかぎり附記することとした。

なお、大慧の周辺の士大夫には、秦檜に対立していた対金主戦論者がやはり多く見られるため、これについても注意した。

(3) 大慧と士大夫たちとの交渉については、おおよそ次のようなことについて考察した。

三七歳で圓悟克勤のもとで証悟するまでの大慧の修行時期において、すでに士大夫との交渉があり、張商英・陳瓘・韓駒・李彭などと親しく交際していたことが知られる。とりわけ江西詩派の詩人とされる李彭とは親密であり、『年譜』その他の大慧関係の記録には、李彭の文集『日涉園集』にも収集されていない両者の交際を示す資料が相当残されている。また、大慧は周知のように、初めての会見で張商英に認められたのであったが、大慧は張商英については生涯にわたってしばしば語っており、その記録も多く残されている。証悟以前のことであるためさほど注目されていないが、大慧の三教とくに儒仏の交渉にかかわる思想については、李彭や張商英などの影響をも考慮せねばならないであろう。

大慧が儒道仏三教一致の立場にあったことはすでに知られており、三教一致は万古不易の道理であると言う。その内容をごく簡略化してみると、三教ないし儒仏の聖人の所説は、それぞれ出世間の法と世間の法であるにもかかわらず、自己自身において具足し円成している本地風光・本来面目をともに指し示し、それに目覚めることを求めるのである。したがって士大夫が儒学の先王の道を学ぶのも「心術を正す」ことこそが根本であり、噴地一発、言語や思念意識によっては達しえないこの事を手にせねばならない。心術が正されてこそ、窮理尽性も忠義も仁義道德も果たされるとするのである。このような立場から、大慧は士大夫に向かって「心術を正す」ことを迫ったのであった。その士大夫層に与えた影響については、大慧ととりわけ親密であったとされる張九成などの七名について、彼らの心の把握のありかたを点検せねばならないが、なお明らかにするには至っていない。今後の見通しとして、彼らも心を中心に据えているのであるが、それは儒学内における陸王の心学とは異なる様相を呈していたはずであり、その問題を究明する必要があると考えている。

大慧の禅を問題にする場合には、周知のように黙照禅への批判が常に取りあげられる。黙照禅批判はこの風潮が蔓延していた福建で始められたのであるが、当初、李邴や鄭昂が大慧の批判に反発したとされ、あるいは、大慧の指摘によれば、劉子翬も二十余年のあいだ黙照禅にならずにいたという。黙照禅批判は禅宗内部にかぎっていたことではなく、それに影響されていた士大夫層にも関わっていたことが窺われる。

朱熹の仏教批判は、すでに指摘されているように、直接には大慧禅への批判であったと言える。朱熹自身は大慧と出会う機会は無かったはずである。しかし、大慧と親密であった士大夫のうち、張浚は張栻の父、呂本中は呂祖謙の祖父の兄にあたり、朱熹の学友であった張栻・呂祖謙はともに大慧と交渉のあった形跡がある。また周知のように大慧のもとで証悟した劉子羽はその弟の劉子翬とともに朱熹の少年期の師であり、大慧が法語を与えている羅博文は、李侗の門人で朱熹と同門となり、彼の友人であったとされる。朱熹の周辺には大慧と交渉のあった士大夫を見いだすことができる。彼が彼の理の哲学をうちたてるにあたっては、大慧禅をぜひとも批判克服せねばならなかった具体的な状況も知られるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

中西久味、中国国家図書館蔵『大慧普覚  
禪師年譜』についての覚え書き、人文科学  
研究、査読無、129 輯、2011、21-42

[学会発表](計3件)

中西久味、中国国家図書館蔵《大慧普覚  
禪師年譜》初探、首届河北“趙州禪・臨  
濟禪・生活禪”學術論壇、2011年5  
月14日、河北会堂(中国・石家莊市)

中西久味、契嵩与天台宗、中日韓天台宗  
學術對話國際學術研討会、2009年  
11月22日、光山県藍天賓館(中国・  
河南省)

中西久味、『輔教編』と『夾註輔教編』、  
第79回禪学研究会學術大会、2008  
年11月29日、京都・花園大学

[図書](計1件)

麻天祥，他、人民出版社(中国)、中日韓  
天台學術對話、2011、556(中西久味、契  
嵩与天台宗、137-149)

6. 研究組織

(1)研究代表者

中西 久味(NAKANISHI HISAMI)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
研究者番号：00143743

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：